

対馬歴史民俗資料館報

第 12 号
平成元年 3 月

編集・発行
長崎県立対馬歴史民俗資料館
対馬厳原町屋敷
郵便番号 817
郵便番号 (09205) 2-3-3687
印刷所
長崎市栄町 6-23
昭和堂印刷
電話 (0958) 21-1234

いわゆる

「朝鮮式山城」について

永留 久 惠

外浅海の南岸にそそり立つ黒瀬の城山に、壮大な山城の遺構を初めて見に行ったのは一九四八年（昭和二十三年）五月であった。同年夏、東亜考古学会の調査団を案内したとき、「朝鮮式山城」という表現をはじめて知ったが、この調査の学術報告書『対馬』には、「城山山城址」の項を立て、遺構の状況を報じた末尾に次のように記している。

これは一見、朝鮮式山城であることがわかる。山稜をとりかこんで、すこし下目に石壁をめぐらし、一つ乃至二つか三つの谷を抱きこんだ形式は、高句麗の

山城子山城（満州輯安県）、大城子山城（平壤附近）、百済の公山城（公州）、扶蘇山城（扶余）、新羅の南山城、明活山城、仙桃山城（慶州）、任那の主山城（高霊）、咸安山城（咸安）、牧馬山城（昌寧）などにみられる。わが国でも筑前大野城、肥前椽城（基肄城）はそれである。

として、『日本書紀』の天智天皇四年（六六五）条に、達率答休春初を遣わして長門城を築かしめ、達率憶礼福留、達率四比福夫を遣わして、大野・椽の二城を築かしめ、その二年後に倭の高安城、讃吉の屋島城、対

馬の金田城を築いた一連の記事があることから、これらの諸城が旧百済の將軍たちによって築かれたものであることを説明している。（達率というのは、百済の貴族の称号で、この人たちは百済亡国の際、日本に亡命した知名士であった）

ここに列記された諸城のうち、旅行の難しい高句麗の二城と、所在不明の長門城以外は全部見た。なお韓国の方々で多くの山城を見てきたしわが国内でも史書にない山城址や、神籠石と呼ばれる山城址をいくつか見たが、ここでいわゆる「朝鮮式」という冠称について、改めて問い直してみたいことがある。

古代山城址のなかで、対馬の城山ほど見事な石垣は、管見の限り見たことがない。比肩できるのは大野城の百間石垣と、忠清南道の三年山城

だけだと思うが、城山が全体に石垣を回らし、総延長三キロもあるのに対して、百間石垣はその名の通り約一八〇メートル程で、三年山城も見事なのは山頂の主要部だけである。

城山の石垣の高さは大概七メートルあるが、落石や埋もれた分を考えると約八メートルと推定され、大野城の現存状況は平均四メートルながら、古い残存部から推して約八メートルという推定は、同じ尺度で設計されたことを示している。工法は自然石の野面積だが、理に合った上手な築き方がされている。

これに対して韓国の古い山城は、無造作に石を積み上げたというだけで、およそ工法に則して築いたと言えるものではない。慶州の明活山城を初めて見たとき、これは石垣が崩れた跡だろうと思ったのが、どこを見ても同じなので、これが朝鮮式山城の本物かと不思議な気がした。

勿論韓国にもりっぱな山城はいくつもある。主都ソウルの北にそびえる北漢山、南に連なる南漢山には大きな規模の山城があり、切石を布築に積んだ高い城壁が蜿蜒と続いているが、これは後世（李朝時代）築造された城である。朝鮮では古来戦乱のたびに山に籠ることが多く、その

都度古い城を修築したもので、対馬の城山のように古い遺構が残っている所は珍しいのである。

朝鮮古代史を専攻する井上秀雄氏も、「石垣の築き方は日本(対馬)の方が上手ですね」と仰有るが、その井上さんは朝鮮の山城を、戦争の時逃げ込む城と、戦鬨に備える城とに大別される。「逃げ城」というのは敵が攻めて来る時、人と物とを収容して避難する所で、無造作に石を積み上げた山城はこれに当る。

韓国では、王城の地は必ず周辺の山に逃げ城があり、地方でも郡単位でその主邑に逃げ城がある。これに對して漢山城や三年山城は戦争に備えた防壁で、堅固な要塞ということになるようだ。

そこで対馬の金田城を前衛とし、大野城・基肆城を以て大宰府を固める備えは、外敵の侵攻を仮想した戦争用の城に外ならず、神籠石と呼ばれる簡素な施設は、逃げ城ということになるようだ。

ここで「朝鮮式」という名称の是非を自問したのは、石垣の工法からいえばこれは日本式と呼ぶのが至当であって、なにも朝鮮式と称すべき理由はない、と思うことが一つ。

対馬の矢立山古墳はおそらく六世紀末とみられるが、その石室の内側は見事な石垣積で、これは金田城築城より半世紀以上古いからである。

しかし山稜を取り囲んで城壁を回らし、抱き込んだ谷に城戸と水門を設けた構図はこの時以外にないこと、これは百濟人によって指図されたに違ひなく、その意味でなら百濟式と呼ばばよい。それを朝鮮式というのは、これが朝鮮半島全土にあり長く続いたからであろうが、しかし抱谷式山城や関門は中国にもあるこ

オランダ人を請い取られる事

長郷 嘉寿

とを考えると、再度朝鮮式でよいのかと反問したくなる。

そもそも外国から伝来した農法や工法に、いちいち朝鮮式とか中国式とは言わないだろう。

以上の自問自答により、朝鮮式を外して古代山城と呼びたいのだが、朝鮮式山城は考古学用語として定着している熟語なので、それを説明する必要があるときは、

いわゆる「朝鮮式山城」と呼びたいと思うが、いかがなものであろうか。

承応二年(一六五三)七月二四日

の払曉、朝鮮濟州島南部の海岸で、折からの暴風雨によって難破した一隻のオランダの貿易船があった。この船は、台湾經由で長崎に向かう途中に遭難したものである。

それから一三年後の寛文六年(一六六六)の八月に、九死に一生を得た生存者のなかの八人が、全羅道の抑留地を脱走し、小船を操って、幸運にも上五島の地に漂着して保護される出来事があった。彼等は、やが

は、彼等の日本への送還は可能と思われること等を明らかにした。

やがて、幕閣から対馬藩主に対して、残された八人の引取方が指示されることになる。

この一文では、五島漂着の報せが対馬に届く経緯や、残る人達の引取方をめぐる対馬側の対応の概略について、明らかにして置きたい。

寛文六年八月二九日の藩庁日記によれば、この日長崎駐在の長崎役から本藩に一通の書状が届けられた。要約すると(1)一三年前に朝鮮のせいじう嶋(濟州島)で難破したオランダ船の乗組六六人のうち、三〇人はその時に死亡、生存者三六人は同島に漂着、捕えられて各所に連行された上けら道(全羅道)に抑留されたこと、(2)母国への送還を申し立てたが「承引されなかつた」こと、(3)その後二〇人が病死し、生存者は一六人になったこと、(4)そのうちの八人が小船を盗んで脱走し、上五島の西海岸なまの浦に漂着し、今月一六日に長崎奉行所に引き渡されたこと、(5)朝鮮には、まだ仲間の八人が抑留されていること等が述べられていた。

なお、この日には、同時に長崎奉行松平甚三郎から藩主宛に書状が届いたとあるが、内容は明らかではない。

多分右と同じような内容を述べたものであろう。

この年一〇月二日には、長崎奉行から再度の来状があるが、日記によれば、「右の様子朝鮮へ被申越、具(二)被聞届被仰上候様ニ」という老中四人からの奉書と、蘭人の口書(長崎奉行が江戸に送ったもの)と

が、江戸から長崎奉行経由で藩主宛に届けられたとある。このことについて『和交覺書』には、「東武命シテ、彼蛮人稍モスレハ耶蘇之者アリ、使ヲ遣シテ彼輩ノ情偽ヲ問フヘシト」と述べているが、これが老中からの奉書の趣意であろう。なお、これについて、『天龍院公実録』には、「東武命」我、通書朝鮮、問其在、彼時蹤跡如何」と、略ぼ同内容の記述がみられる。

藩では、「從御公儀御奉書被遣候付、朝鮮国へ右之意趣被仰遣候ニ付、使者吉川二郎兵衛ニ被仰付(日記一〇月九日)として、使者の持渡る書簡の準備が進められるが、都合により使者の役目は吉川に代って田嶋左近右衛門に命ぜられる。年が改って翌寛文七年(一六六七)正月二〇日の日記に、田嶋に対して「日和次第出船可申付候」とあるので、彼はこの頃渡海したものであろう。

なお、この年正月一八日の日記に、当時たまたま来島中の朝鮮の訳官に對して、右の蘭人一件について尋ねたところ、「左様之者有之儀終(二)不承候由」とあり、又右の情報を書き送ったと思われる釜山の判事宛の急ぎの書状を、訳官が田嶋の便に託したことが書き残されている。

田嶋は、この年六月八日に返翰を持って帰国した。これによって、前記の蘭人抑留の経緯や、耶蘇宗門とは無関係である事が確認できた訳である。また、この日の日記には、「出宴席之刻、接慰官東菜口上ニ被申候ハ、如何様ニ成共、御差図次第ニ可仕由申候」と記しているの、朝鮮側では残留蘭人の処置についても、このように言及したのであろう。

残留蘭人引取の指示の日時は明らかでないが、江戸から帰任した長崎奉行の許へ遣わされた藩の使者が、一〇月一五日に帰国した記事があるので、この時かも知れない。藩が久和太郎左衛門を使者に命ずるのは、寛文八年(一六六八)正月である。

この年二月一七日の日記には「今昼参判江之御書翰御調被成」とあり、また「此御書翰は、先年朝鮮国へ漂着候阿蘭陀人八人、今ニ朝鮮国へ罷在之由ニ候間、無相違此方へ送返之

候様ニ与之御事也」とその内容についてもふれている。三月二日には久和に對して「書簡并別幅相渡ス」とあり、同五日には、久和以下に「誓旨血判申付ル」とあるので、この直後に出帆したものであろう。五月二〇日の日記に「阿蘭陀人近日参着可仕之間、宿并馳走賄方等前以可申付之旨、勘定方へ申渡ス」とあるので、倭館守からの連絡が届いたことが知られる。この時の蘭人宿は松水軒に定められた。

六月一八日「阿蘭陀人召連只今参着之由」として、久和が蘭人を召連れ、返翰を持ち帰ったことが記されている。藩ではこの日、長崎への護送に当る人達を指名している。松水軒に落ち着いた蘭人達は手厚く遇され、一日棧原の館に召されて料理とくだされ物を受けた。

四〇日余の滞在の後、八月三日早朝、長崎への使者深見四郎兵衛に伴われて一行は島を離れた。同行の護

送人は一五名(十五、医師一、通詞一、組之者八)。深見はこの月二四日帰国して復命する。

これより先、一行の府中到着の直後に、切支丹奉行二名と深見によって「改め」が行われた。理由は、朝鮮からの引渡しの人員は七名で、他の一名は彼地で死亡したということについて再尋問が行われた訳である。七人の蘭人は口を揃えて一名の死亡を申立て、「死骸葬候段は、朝鮮人阿蘭陀人寄合致取置候段口書仕候」と口書を差し出した。朝鮮側返翰にも「其一人前歳作故、生存者柒(七の意)口(実録)と述べられている。三人の改め人は、これ以上の追及を行ってはいない。

しかし、今日では、彼地に残留を望んだ現地妻帯者一名を除いた七名だけが、日本側に引渡されたことが知られている。一行は、長崎奉行からオランダ商館に引渡され、程なく故国への出発が許される。

対馬州

日野義彦

昭和三十(一九五五)六四)年代まで、巖原の町中でも、近郷の女の

人が、炭俵を小柄な対馬馬に積載して売りにくるのに会ったものである。

現世紀初頭の明治三十七(一九〇四)年には、対州馬は四千四百余頭もいたが、終戦の昭和二十(一九四五)年は二千六百九十余頭もまだいた。戦後、対馬の過疎化が進み、道路が整備され、農機具の動力化等で、対州馬の運搬等の役割りが少くなり、更に良馬の島外移出も加わり、昭和四十二(一九六七)年には、到々千頭を割って九百六十余頭になった。昭和四十七(一九七二)年、対州馬保存会が

する対州馬は、何時頃から対馬にいたのであろうか。対馬の数ある考古遺跡から馬骨は未出土であり、出現は不明である。対州馬は中国の四川・雲南両省が原郷で、大陸南部の海岸地帯を経由して、縄文末期・西日本に到来したと考えられるともい

く、神馬の瑞相に合い、大宰府を経て朝廷に献上されたところ。この馬は豆殿内院(厳原町)産という。中世の対外交渉史にも対州馬は登場する。十三世紀から十五世紀に

った。四所の牧馬場は佐護の中山(上県町)、廻の池田・横浦の長崎(ともに豊玉町)、国府の有明(厳原町)といわれる。

結成され、在来の対州馬の保存と、増産に取り組まれたものの、減少は加速し、昭和六十三(一九八八)年には、僅か五十一頭という現状にたち至った。大正(一九一二〜二六)の頃までは、対州馬の売買の話がまとまると、「まつり」といって、双方の家で、世話した博労が囲炉裏の「カノウサマ」(五徳)に、米・塩・酒を供え、家主と共に、「馬頭観音様に奉る。伯樂天に奉る。売って千貫。買って千貫。お家繁昌・かど宝。」と呪文を唱えたという。また所によつては、解熱の薬に対州馬の糞をせんじて飲ませたと、古老は話す。

小柄な対州馬の体高について、林田重幸氏は著書『日本の在来馬 対州馬 日本中央競馬会発行』に、興味ある研究を発表されている。要約すると次のようである。

中世の対州馬に関して、『海東諸国紀』(朝鮮の申叔舟著 一四七一年成立)の対馬島の条に、「…島主の牧馬場は四所にして、二千余匹ばかりなり。馬は多く曲背なり。…(原漢文)とある。中世の対馬は馬の産地であ

また李朝実録には、対馬からの贈馬とは逆に、曲背の馬の改良と増産のためと考えられる朝鮮馬の導入の条がある。一四八一(文明十三)年八月の条に、島主宗貞国が朝鮮への書契の中に、次の記事がある。

「まつり」といって、双方の家で、世話した博労が囲炉裏の「カノウサマ」(五徳)に、米・塩・酒を供え、家主と共に、「馬頭観音様に奉る。伯樂天に奉る。売って千貫。買って千貫。お家繁昌・かど宝。」と呪文を唱えたという。また所によつては、解熱の薬に対州馬の糞をせんじて飲ませたと、古老は話す。

と、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

の勢力が増大して、小武氏の下にある宗氏にとり、不利の兆が見えてきた時代に当る。朝鮮に接近して、交易により活路を見出そうと、応永六(一三九九)年、宗貞茂は土産と馬六匹を贈った。貞茂は翌七(一四〇〇)年、また十四、父靈鑑も六匹贈って、倭寇の嚴禁を約した。朝鮮は父子の誠意をよろこび、対馬島主の望む米・豆・麻布・虎豹皮等の物を贈り好意を表した。その後、朝鮮の『李朝実録』には、島主の宗氏は度々馬を贈ったと記されている。

その年の十月の条に、「特賜馬二匹」どうか不明であるが、「特賜馬二匹」とある。その後にも賜馬があり、その御札に馬を進上している。

頭がやや大きく、眼は豊円で澄み、温順で賢く、粗食にたえ、力が強く、耐久力に富み、蹄鉄なしで対馬の石ころの山坂を、荷を積んで上り下り

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

「：敵邑驚駭甚はだ多しといえども、駿逸あることなし。さきに賜う所の駿馬、盡く九州諸大人のために索び去られ、わが馬群は久しく己に空し。伏して恩賜を望む。…毛色は純白なる者、あるいは白にして駿・尾の黒き者、あるいは赤色にして黒き者、鼻ならびに陰囊の全き者。大馬一匹。中馬一匹。これを望む。俯して許容を賜え。…」(原漢文)

対馬の貴重な文化遺産ともいえる数少ない対州馬は、現在、農家の厩舎に、美津島町の島山島の牧場・同町雑知の飼育場で、草を食みながら仲間がふえ、いななき合える日を待ち望んでいる。

北海道和種馬、木曾馬(長野県)、御崎馬(宮崎県)の両者にまたがり、中世鎌倉時代の軍馬の馬格の様相を呈することがわかった。

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の貴重な文化遺産ともいえる数少ない対州馬は、現在、農家の厩舎に、美津島町の島山島の牧場・同町雑知の飼育場で、草を食みながら仲間がふえ、いななき合える日を待ち望んでいる。

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の貴重な文化遺産ともいえる数少ない対州馬は、現在、農家の厩舎に、美津島町の島山島の牧場・同町雑知の飼育場で、草を食みながら仲間がふえ、いななき合える日を待ち望んでいる。

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の貴重な文化遺産ともいえる数少ない対州馬は、現在、農家の厩舎に、美津島町の島山島の牧場・同町雑知の飼育場で、草を食みながら仲間がふえ、いななき合える日を待ち望んでいる。

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の貴重な文化遺産ともいえる数少ない対州馬は、現在、農家の厩舎に、美津島町の島山島の牧場・同町雑知の飼育場で、草を食みながら仲間がふえ、いななき合える日を待ち望んでいる。

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の貴重な文化遺産ともいえる数少ない対州馬は、現在、農家の厩舎に、美津島町の島山島の牧場・同町雑知の飼育場で、草を食みながら仲間がふえ、いななき合える日を待ち望んでいる。

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の貴重な文化遺産ともいえる数少ない対州馬は、現在、農家の厩舎に、美津島町の島山島の牧場・同町雑知の飼育場で、草を食みながら仲間がふえ、いななき合える日を待ち望んでいる。

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の厳しい環境に適した馬として、対馬島民の愛情により育てられた対州馬の先祖が、日本の歴史に登場するのは統日本紀(延暦十六〜七九七年成立)である。天平十二(七三九)年、馬身は青く、髪・尾は白

対馬の貴重な文化遺産ともいえる数少ない対州馬は、現在、農家の厩舎に、美津島町の島山島の牧場・同町雑知の飼育場で、草を食みながら仲間がふえ、いななき合える日を待ち望んでいる。